

案で、欠席届を連署で出そうといふことになつた。各人の名をすらりと書いて、最後に「右の者共腹痛のため欠席致し候間。」云々といふやうな理由を書いて、級長の林繁三君が級主任の小島先生の所にもつて行つた。私もあとからついて行つて見てゐた。

小島先生は、それをじつて見てゐられたが、いつものやうな温顔で、靜かに、これは書式が違ひますからといつて林君に返された。林君も、いたづら半分について行つた連中も、二の句がつけずに受取つて歸つて來た。そして、もうこれ以上いたづらをつゞける氣になれなかつた。先生の温和な靜かな心から、一つの威力が生れてゐた。

私は、人々の心をいつまでも動かすものは、大聲疾呼するいはゆる精神家流のお説教から生れないで、却つて靜かな科學的精神から生れると思つてゐる。

僕　と　五　高

藤　田　徳　太　郎

五高を出て十五年になる。その間一度も五高を訪れた事はない。五高に居る間、二年間花陵會の宿舍に厄介になつてゐた。そんな關係で、あそこが改築される時、建築費の中に若干を寄附した。卒業後では、まあそんな事が思ひ出されるくらゐのものである。僕らのゐた時分の熊本は、あまり綺麗ではなかつたが、その後すつかり近代都市化したさうであるから、一度訪れたいと思つてゐる。

在學中の思ひ出としては、白路といふ歌の雑誌をやつてゐた事と、音楽みたいなものをやつてゐた事とが、一番記憶に残つてゐる。最近も林房雄君にあつたら、その時の事にふれて話したりしてゐたが、林房雄君もその仲間だつたし、それ

に、森本治吉君や中島光風君のやうな國文學者も、やつぱりその仲間から出てゐる。だから學生時代の仕事といふものはつまらぬ事をやつてゐるやうで、案外いつまでも影響を残してをり、將來の成長にも深い關係があるから、なかなかかにはならないのである。さしづめ僕なども、五高時代にやつてゐた歌と音楽、此の兩方を、一緒にしたやうな研究を、今はやつてゐるわけだから、僕の將來の方針は、五高時代にきめられたやうなものだ。

それから、校友會の懸賞小説で、一等になつた事がある。圖書券が貰へるといふので、大いにはり切つてゐたら、その年には、豫算の關係で、圖書券の副賞はなく、銀メダルだけといふ事で失望した。だが、此の銀メダルは、今でも僕は失はずに持つてゐる。その前後には、田代三千稔君や徳廣巖城君なども、一等になつた。徳廣君は今でも小説をやつてゐるさうだが、田代君はすつかり英文學者になつてしまつた。結局、その當時の連中で、今此の方面で、立派になつてゐるのは林君だけといふ事になる。

懸賞小説に一等になつたので氣をよくして、學校の雜誌に小説めいたものを二三書いた。併し、それだけで、大學に來てからはすつかり創作をやめてしまつた。歌の方も作れなくなつた。だが、歌は、五高時代から、僕はまづくて、森本君などの方が、すつと上手だつた。どうも僕は散文的で、歌にはならなかつた。これはいかんと思つて、歌の方をやめたのは、自分を知る賢明さがあつたとうぬぼれてゐる。併し、小説の方は、その後續けてやつてゐたら、どうにか物になつてゐたのではないかと、これは今でも多少の未練はある。とかかくうぬぼれとかさけは誰でもあるものだから――。

先生の思ひ出は、やはり自分達の輩の方が一番印象に深い。兩三年前の夏には上田英夫先生に、又、つい先頃には田中辰二先生にお目にかかつた。併し、これは僕が直接教はつたわけではなく、學問の先輩として、僕には親しいお名前だつたのである。八波先生も大先輩で、八波、上田の兩先生は、僕の在學中に赴任せられたのだ。その他の先生方は――と思つて、職員録を開いて見ると、いろいろな事が思ひ浮んで來る。苦虫をふみつぶしたやうな山形先生が、外國から歸らると斷然スマートで愛嬌よくなられた事や、秋田先生の豪華でハイカラな應接室に伺つた時の事や、飯島先生が赴任せら

れた時に、一燈園でどうやらかうやらと、あられもない噂話をしてゐた事や、さては河瀬先生の、いかにも英國式のゼントルマンであられた風貌など、——それから土方君！あなたと寒い冬の長野で、一緒に炬燵にあたりながら長い間語りあひましたねえ。

熊本に、はじめて行つた時は、暗い汚ない街だと思つた。此んな所に三年間辛抱しなければならぬのかと思ふと情なくなつた。熊本についた晩、學校の近所にあつた薄暗い小つぼけな錢湯に行つて、一緒に入つてゐた人の話が、さつぱり分らなかつたので（僕は山口縣の者なのだ）、悲哀を覺えた。所で、三年たつて、いよいよ熊本を去る時になると、どうにも名残が惜しまれて、去るに忍びないものがあつた。熊本の町も人も、實によい。見つきは悪いが、つきあふと、腹の底までしみ込むやうなよさを持つてゐる。

併し、熊本には、どうも美人が少いやうだ。僕の中學時代の友人が、六高に入つてゐたので、岡山に遊に行つた事がある。すると、その男が、「君熊本といふ所は、實にシヤンが少いちやないか」といふ。所が、さうゆふ岡山が又、美人のぬない所なのだ。もしぬたら、これは移住者と見てよい。だから、早速逆襲して、「岡山の方が、もつと美人がぬないよ」と云つてやつた。それで、熊本の方が美人がぬない、いや岡山の方がもつと汚いといふので、大論戦をやつた。結局實地を檢證しようといふので、二人で後樂園に出かけた。すると、ゐたゐた、悠然と此の公園を漫歩してゐた御婦人が、なんと典型的なおカメ面で、しかも、兩方の頬つべたには、御丁寧にも、日の丸までもつけてゐようといふ、よくよくのしこ女なので、さすがの彼も「俺の負だ」と云つて胄を脱いだ。それで、漸くわが熊本の爲めに凱歌をあげた事があるが、由來中國、熊本は美人系を離れてゐるので、美人は少い。併し、これは五高健兒の爲めには、至極幸ひな事である。

五高時代の友人に、東京でもいろいろな會であふ事がある。クラス會も時々やつてゐるし、時には、同じ時の卒業生の合同クラス會もやる事がある。電力國營案で名をあげた、奥村君なども、いつかの會であつた事がある。又、白バラ會とかいふ、名だけきくと、若い乙女の集のやうな會があるが、これは、五高卒業のジャーナリズムに關係のある人々の會ら

しく、出かけると、いろいろな人にあふ。花陵會の集も時々ある。又、僕らの仲間では、五高國文會といふのを作つてゐて、此の間も上野で、新入學生の歡迎會をやつた。

實はいろいろな事で忙しく、なまけてゐたら、委員の方からお叱りを受けたので早速一文を認めた。宜しくお讀み捨てを願ひたす。

自由と獨立の氣風

林 房 雄

僕のゐた頃の五高は自由であつた。「學問の獨立」と「學徒の人格の尊重」といふよき傳統と氣風があつた。田舎中學の固苦しく狭い規約づくめの中から、急にこの新しい雰圍氣の中にほうりこまれて、生徒の方が面喰らつたほどである。

僕は貧しい生徒であつたが、龍南三年間に、まことに、よく遊びよく學ぶことができた。拘束されることなく、己の欲するところに就くことができた。

この自由と獨立の氣風、今の龍南にありやなしや。

大正十二年の卒業であるから、すでに十四年の過去である。一昔半か。しかし未だ失はれざる青年の氣風が現在の僕にありとせば、龍南三年の生活に負ふところが多からう。

熊本には、その後行つたことがない。龍田山と子飼の渡しも、どう變つてゐるか知らぬ。黒髮村が黒髮町になつたことは、雜誌部委員の葉書の處書きでわかるが。

わが青春を護り育てた、かの自由と獨立の氣風、今の龍南にありやなしや。